3．第12回　研究会報告

【開催日：平成20年8月10日（日）】

（1）特別講演

「羅生門化する日本」

皇學館中学校・高等学校　校長　大島謙

私の原点

今日の演題はちょっと過激かもしれません。でも、私が何を言いたいのか察しがつく方もいらっしゃると思います。今、日本は、学校だけでなく、国全体がこんな風になりつつあって、もうそろそろ限界であり、今が押し止める最後のチャンスかなとも感じる訳です。

本題に入る前に少し自己紹介をしながら、私の経験したことの中から、まずお話を始めさせて頂きたいと思います。私は長崎県生まれですが、中２で鎌倉に引っ越して以来、４０歳過ぎに海外駐在するまで関東暮らしでした。でも、心は未だに九州男児だと頑固に思っている次第です。私達は戦後のベビーブーム世代でして、新しいもの好きで、しかし何でもかんでも競争、墓場まで競争の世代だと思っています。引っ越した翌年、神奈川県立湘南高校という伝統校に入学。高校時代はフェンシング部に入ったのですが、私達がいた３年間は突然変異して関東圏で強豪校と言われました（３年生の時にはインターハイで準優勝)。実は、新しいもの好きだからフェンシングを選んだのではなく、戦後、ＧＨＱ指令であらゆる“日本的なもの”が日本社会から追放され、その影響で私の高校には剣道部が無かったのです。私達の世代は、アメリカ的なものには何でも憧れた世代だったという気がします。今から思えば、アメリカの「精神的な植民地化」が功を奏し始めた時代

だったと思います。一方で、社会主義、共産主義との全面的な闘いの時代でもあり、我々の大学生時代の「全共闘」運動はまさにその象徴だったと思います。私は“ノンポリ”と言われた部類でしたが、精神的には確実に植民地化されていたと思います。

海外駐在で学んだこと

私が入社したのは総合電機メーカーのＴ社で、大型コンピュータ事業部でした。しかし、その世界もアメリカの巨人・ＩＢＭが世界の覇権を握っていました。通産省は「国策」としてコンピュータ６社を３社に整理統合の方針を出し、我社の事業はＮ社に吸収されました。撤退した事業部の社員は、社内でも肩身が狭く惨めなものでした。しかし、その挫折をバネに“パソコン”で息を吹き返したのでした。しかし、一旦撤退した事業部、消えて無くなった事業部の出身者というのは「国を無くした流民」のようなものだとつくづく思います。私自身、その後転籍した事業部（本部）の数は両手では数え切れません。そして、何処へ行こうと「外様」なのです。移り住んだ事業部で頭角を現しても、出る杭は必ず打たれます。平穏に生きていこうと思えば、自分をかなりの程度押し込めるしかないでしょう。これは何も、Ｔ社だけのことではなく、日本の大きな会社ならどこにもあった世界です。私達のベビーブーム世代は何でも競争という時代であった反面、企業世界には「学閥」、「門閥」、「閨閥」、「スポーツ閥」、その他ありとあらゆる閥、つまり、競争のない陰の部分もまた存在していました。そんな世界で、国の無い「流民」、閥を持たない人間は新天地を求めて冒険をするしかなかったのです。私の場合、それは「海外駐在」でした。勿論、社内には国際事業部という「譜代」の者達がいましたが、国内はいざ知らず、海外ではそれこそ実力主義でした。公平な世の中には自由で正当な競争の存在が必要です。閥を持たない人間でも実力で上って行くことができる機会の存在が世の中を公平にしてくれるのだと思います。その正当な競争を奪い去り、後に“閥の世界”のみが残ったら、そんな社

会に子供達は夢や希望を持てるでしょうか？企業時代の私には、後述する「日系移民」の心境と通底するものがあったような気がします。だからでしょうか、私には日系移民達の歴史がとても琴線に触れるのです。振り返ってみれば私の人生は、今現在の場所に来る為に修行させられてきた人生だったような気がしています。そして、海外生活の約8年間で、初めて自分が日本人だということ、そして、日本人のアイデンティティとは何なのかを深く考えさせられたのでした。

さて、次は今日の本題に関係のある話になります。私は、ヨーロッパでは市場開拓、そして米国では投資事業をやってきました。ヨーロッパでは、すぐに幾つかの新規技術に遭遇しました。例えば、今では当たり前になっている「電子マネー」システムです。英国で“Mondexカードシステム”[1]に出会い、技術提携して日本でいち早く市場創生し、先入者利益を得ようと提案しましたが、「石橋を叩いても渡らない」日本企業の性格に2年以上もの時間を費やした揚句、断念するしかありませんでした。次は、携帯電話の汎用OS（オペレーティング・システム）でした。勿論、PCのMS-Windows互換でした。しかしこれも、「あんな小さな携帯電話画面でPC画面を見る奴などいるものか！」と一蹴されました。その後も、何度か検討してくれるようトライしましたが、国内の「譜代」の意見を覆すことはできませんでした。海外の「外様」に期待されたのは、国内の「譜代」が製造する製品を売りさばく市場の開拓でした。新規技術の導入というのは表向きのテーマでしかありませんでした。想定以上の4年間をイギリスで過ごした後、日本へ帰国することになりましたが、日本の本社には「外様」が本気で打ち込める仕事があるとは思えず、次なる海外の新天地を探すことを心に決めて帰国しました。そして、数ヵ月後には米国ボストンの投資子会社の後任責任者として赴任しました。“捨てる神あれば拾う神あり”と言いますが、その通りです。企業時代、私が尊敬していた数少ない上司の一人が私を強く推薦してくれたのでした。その後、この経験も実にいろいろなことに役立っていると思います。

1：ICカード型電子マネーのひとつ。イギリスのNational Westminster銀行が中心となって設立されたMondex International社によって開発されたシステム。

日本人の智恵と誇り

ところで、皆さんならば大変興味をもたれるであろう「投資ファンド」をはじめ、金融関係のシステムというと、アメリカやヨーロッパの専売特許のように思っていらっしゃる方が多いと思いますが、実は元々、日本人の智恵の中に同じものがあったのです。それが「講」というシステムです。この概念は元来、「人の集まり」を意味していて、村の古老達の討議の場や偉いお坊様の説教を聴く場もまた「講」と言われていました。そこから発展して「無尽講」などが行われるようになりました。これは実は「投資ファンド」そのものです。昭和の初期まで、まだ日本が（今の若者達には考え及ばないような）貧しかった頃、国内で生きていけない大勢の人達が海外へ移民として移り住みました。そのとき、苦しい中から皆がお金を出し合い、最も必要としている人に資金を貸し出し、成果が上がれば御礼を込めて余分に（利子込みで）返金する仕組みです。それは信頼が基盤となって、互助精神が発揮されたシステムでした。また、移民達は子供の教育に熱心でした。自分の着る物、食べるものを削ってでも、子供の教育を欠かすことはありませんでした。そして、日本の子供達もまた、そんな親の苦労を知っている故に、懸命に頑張りました。地元の学校では成績上位者を日本人が大勢占めるようなったそうです。しかし、戦争の足音が近づくに連れて日本人の移民を締め出す政策がどんどん作られ、さらには迫害されるようにまでなりました。日本人には土地を売ってはいけないという法律を制定したり、日本人の子供達を現地校に入れずに、遠い僻地に作った日本人専用学校に通わせる政策などが実例です。そして、終局的な迫害政策が米国における「日系人強制収容」でした。そのとき、日系人は全ての財産を没収されました。しかしこの時、ハワイだけは強制収容対象から除外されました。それは当時、既にハワイの日系人は総人口の 4 割近くにもなっていたからであり、ハワイの軍隊に所属する日系人も多かったからです。財産の没収や強制収容などを行うと、暴動が起こることをアメリカ政府が怖れたからでした。

さらに、強制収容所の日系人の若者達は、米国に忠誠を誓い軍隊に志願するか否かという「踏み絵」を強制されました。そして、第４４２部隊（日系二世部隊）が編成されヨーロッパ戦線の最前線に投入され、米国軍史上最も戦死者と勲章を受けた兵隊が多い部隊となりました。そんないわれなき差別と偏見を耐え抜いた歴史を、後世の日本人に伝えていくべきだと思うのです。１９８８年、ようやくレーガン大統領時代になって初めて公式謝罪がなされ、一人当たり２万ドルの補償をすることが決定されました。ロサンゼルスにある「全米日系人博物館」にはアメリカに移住した日本人達の歴史が詰まっています。日本人が最も日本人らしかった時代の人々の歴史です。カリフォルニアに限らず、ハワイやブラジル、その他南米各国に移民として海を渡った日本人達のことを私達は忘れてはいけないと思います。しかし、これまでもそして今も、そんな日本人の歴史を学校では全く教えません。６３年前にＧＨＱが行った「日本人らしさの排除」という占領政策を今もまだ、日本人の教育者や学者達の多くが実施し続けているのです。そして同時に、昔からの素晴らしい「日本人の知恵」もまた、失わされているのだと思います。その結果として今、これまでとても考えられなかったような反社会的な風潮が蔓延しています。

さて、ここに紹介している記事は“溶けゆく日本人”として新聞紙上を賑わしたほんの一部です。その中で最も情け無かったのは、特急列車内で女性に乱暴を働いている男を見ても、そして女性がトイレに連れ込まれてもなお、乗客達は見て見ぬ振りをした「サンダーバード車内強姦事件」でした。犯人のみならず乗客達にも、“それでも日本人か！”と言いたくなる事件でした。さらには、老若男女を問わず「自己チュウ」の叢生。企業世界にも、バレなければ何をしても、法律を犯しても平気な、責任感も品格も無い「経営者達」が増えました。私達が「民間人校長」になった頃、盛んに「企業に学べ！」と言われたものでした。その企業の体たらくぶりには情け無い思いをしています。政治家にも経営者にも「自己チュウ」が増えたということでしょうか。これらは、戦後もてはやされた「個人主義」や「子供中心主義」教育

の成れの果て、戦後民主主義や平和オンリー主義に酔いしれた敗戦国の実の姿…と思うのは私一人ではないでしょう。今や、学校も「街中」や「公園」と同じになり、学校としての権威も品格も失くしつつあります。同時に教師のそれも失われつつあるのです。国はといえば、領土を侵され、国民を拉致されても何もできない有様で、これでは主権を放棄したのも同然です。国民にしても、それでも平和であればいい、という総「自己チュウ」の現状なのではないでしょうか？果たして、米国式の「グローバル化」は正しかったのでしょうか？真剣に考えてみるべき時です。そして、もっと日本人らしさを再発見するべき時だと思うのです。「会社とは“株主”のものですか？」、「サービスとは買うものなのですか？」、「終身雇用制度とは日本の悪習だったのですか？」、「投資ファンドとは金儲けだけのものですか？」、「征服の論理の西洋と調和・共生の論理の日本の伝統の違いは？」、さらには、「世界一の教育国とは？」、「世界八大文明の一つと言われた日本文明とは？」…学ばなければならないことは山ほどあります。少なくとも、これから２１世紀が終わる頃までは、自然に対して常に「征服の論理」の西洋的思考の時代は終焉し、「調和と共生の論理」の東洋の、特に「日本」の出番ではないかと個人的には思っています。但し、当の日本人にその意識が無ければ出番どころか、存在価値すら疑われかねないとも思います。

学校教育が抱える問題の本質

続いて、現在の「学校世界」について考えてみたいと思います。実は、早急に対策を講じなければならないのが「学校」だと思っています。「ゆとり教育」という美名の下で大量の“おちこぼれ”を増産しているのですから。義務教育の９年間、「児童中心主義」の名の下に放任し、甘やかし、子供達の能力開発を怠った結果が高校生の甚だしい学力低下の現実を招いています。公立小中学校は、高校入試の年齢に達するまで、何ヶ月、何年間不登校であっても進級させ、卒業させるの

です。だからこそ、市町村教育委員会は、２００７年に始まった「全国学力調査」結果の公表を嫌がるのです。あれは競争のための模擬試験とは違います。いわば、小学校と中学校のそれぞれの「卒業程度学力到達度診断テスト」なのです。それなのに「学校の序列化を招く」という、お決まりの文句で公開を阻止しています。本来、あの試験では学校の序列化などできません。どの学校も、当たり前に「卒業程度」の学力を付けさせていたなら、差など出ない筈なのです。序列化などできる訳もありません。市町村教委や学校の「逃げ口上」でしかありません。恐らく、自分達のやるべきことがやれていないことが白日の下に晒されるのが怖いのではないでしょうか？さらにまた、逃げ腰になる原因には、学校側だけではなく、自分の子供、自分の立場しか考えない一部の保護者側にも大きな原因があるといえます。厳しい指導に対するモンスターペアレントの増大と、それに毅然と対応できない学校側の逃げ腰が、教師の時間を奪い疲労感を増し、ますます生活指導と教科指導の時間が削減されていくという悪循環でしょう。しかも、今や高校入試も「全入容認時代」です。どんなに入学試験の点数が低くても、「定員内足切り」は教育委員会が認めません。これもまた「ゆとり教育」の悪影響ではあるのですが。もし、このまま少子化が進めば、どの進学校にも早晩、学力低下の波が押し寄せます。小中学校で、現在のままの「落ちこぼし・放任教育」（＝ゆとり教育）が続けば、勉強しなくても中学校は卒業できますし、高校も定員内であれば入学させるしかないのですから。そうして、最後は高校までの１２年間で中学校までの教育課程を教えることで手一杯になるのではないでしょうか。しかし、それで止まる訳も無く、さらに際限なく落ち込んで行くだけだと思います。今でも、分数計算ができない大学生、国語力が中学生並みの大学生が増え続けているのですから。

ケーススタディ１

この新聞記事（資料１）は、もう２年ほど前になるでしょうか、某新聞の「学び直しの学校」というシリーズの記事です。一つは、美容

資料1



学び直しの学校 1

再挑戦の支援 試行錯誤

教育ルネサンス No.322

不登校・中退経験者の受け入れを掲げ公立高校が増え始めた。

「マッサージはんさに指だと力が強いので、中指と薬指を使います」

講師の指導で、生徒がクリームを塗った顔の上に指を走らせる。美容専門学校ではない。東京都立六本木高校の授業、「エステティック基礎」だった。

都立4校目の「チャレンジスクール」は、昨年、六本木ヒルズが間近に見える、1、2年生約300人中、不登校や高校中退の経験者は7割余。そうした生徒の再チャレンジを促す学校だ。

朝が苦手な生徒にも通いやすいよう、授業は朝8時50分からの午前3時間、午後1時から20分からの夜間部の3部制（昼夜間定時制）を取る。

国語、数学、英語などの必修教科以外の時間は、50種類以上もある自由選択科目から自分で講座を選ぶ。メーキャップ・ジャズダンス、コンピューターグラフィック、声優の基礎表現といった科目で、通学意欲を高めようとしている。

中学2年で不登校になった女子生徒（16）は「やりたいことができて楽しい」と美顔を見せ、同時期にいじめが原因で不登校になった別の女子生徒（16）は「友達もたくさんできた。入学できて本当に良かった」と学校を高く評価する。

＊

そうは言っても、1年目は手探りだった。

「元不登校であってもなくても、生徒が自主的に教室に入るのが理想と考えて、始業時のチャイムを鳴らさず、開始後15分まで出席扱いにしたら、生徒は15分遅れで集まるようになった。3学期には『出席は十分』と、校内で自分の手首を切るなどの心の悩みを抱える生徒が、あわてて車で病院に運ばれる騒ぎも起きた。

都教育相談センターから心理学の専門家や指導主事を招き、全教員が研修を受けた。「私を見て、というサインの場合もある」といった話を聞き、保健室でまず手当てをして、落ち着いたところで話し合うという方法を教わった。

一教師が共通の知識を身に着け、生徒とのコミュニケーションを密にするように努めた結果、自傷行為の目が動き出している。（長谷部研二）

来年も1回取れればよい」という生徒も増え、1年目の出席率は約85%、単位取得率は95%。ほとんど単位を取れない生徒もいた。

「校内で集まるのを切り、あわてて車で病院に運ばれる騒ぎも起きた。

始業、終業のチャイムは鳴らすようにし、遅刻や早退は4回で欠席1回と扱うなどの「ルール」を厳しくした。授業があるのは「廊下がにぎやかになる」などの声をかけ、学校を休んだ生徒には、1年目から担任にまかせず、学校全体で保護者に連絡している。

普通の高校と同じ時期に実施される7月の前期入試の倍率は3・37倍。大きな期待の中、試行錯誤の2年目が動き出している。（長谷部研二）

ような事例も報告していきました」と富田正次校長（56）。

今年度は、非常勤講師が規定より増員になった。出席率と単位取得率の各10%アップを学校経営計画に明示している。

始業、終業のチャイムは鳴らすようにし、遅刻や早退は4回で欠席1回と扱うなどの「ルール」を厳しくした。授業があるのは「廊下がにぎやかになる」などの声をかけ、学校を休んだ生徒には、1年目から担任にまかせず、学校全体で保護者に連絡している。

普通の高校と同じ時期に実施される7月の前期入試の倍率は3・37倍。大きな期待の中、試行錯誤の2年目が動き出している。（長谷部研二）

六本木高校の「エステティック基礎」の授業

チャレンジスクール　不登校経験者や高校中退者が通いやすい体制を取る都立高校。入試に学力試験はなく、高校生活への意欲や熱意を書いた作文や面接で合格者を決める。定時制高校の統廃合を含む高校再編の中で、2000年に第1号が誕生。4校とも、昼夜間定時制の単位制を取り、高倍率になっている。昼夜間定時制の単位制高校は、他の自治体でも増え始めている。

2006年5月16日付　読売新聞

専門学校ではありません。れっきとした都立普通科高校です。ほんの数時間、英数国の授業の後は全て、エステティックやメーキャップ、ダンスにネーリング等々の自由選択科目がズラリと並ぶ「チャレンジ・スクール」というものです。もう一つは、「二桁の割り算から歯磨きまで」教えなければならない「エンカレッジ・スクール」という名の都立高校。ここでは、小学校時代に勉強につまづいた後、放っておかれた生徒達が集まる学校です。当然、高校の入学試験はありません。改めて「読み書きソロバン」を教え込む高校なのです。一見、とても親切な、愛情溢れる学校のように思えるのですが、果たしてそうなのでしょうか？ここまで放置してきた義務教育学校、つまり小中学校の

資料1



学び直しの学校 2

割り算から歯磨きまで

中退させないことを主眼に置く高校がある。東京・足立区にある都立足立東高校。1年生の数学の授業で、生徒が取り組むプリントには「216÷9」「831÷3」といった問題が並んでいた。九九ができれば解けるが、うろ覚えの生徒も多い。授業はこのため、生徒たちが小学校時代のつまずいたが確認しながら進む。

同校は2003年度、都のエンカレッジスクールに指定された。「社会生活を送る上で必要な基礎・基本的学力を身につけること」が目標。理由は様々だが、同校では小中学校時代に勉強につまずき、放っておかれた生徒が多い。

教育ルネサンス No.323

割り算を学ぶ足立東高の数学の授業。生徒がつまずいた所までさかのぼるのが基本だ

このため、入試には学科試験はなく、面接や小論文などを通し、いまの学力よりも「やる気」を重視する。授業も教学や英語などの主要教科では、十数人の少人数・習熟度クラス。集中力が切れないよう30分授業」を行い、つまずいた所までさかのぼる。

「読み書きや計算ができんと出来ないと、就職試験を受けても落とされるし、仕事をするにも困る。その基礎学力を身につけさせたい」と、星野喜代美校長(52)。そのために、まず「中退しない」ことをめざす。

＊

同校は00年度に全校生徒588人(1・3倍)が中退した。教室から抜け出す生徒も続出、トイレにはたばこの吸い殻が散乱する荒れた高校だった。

2年前に赴任した星野校長は目標をぼって、対策を立てた。柱の一つが、厳しい親身な生活指導だ。茶髪やピアスは禁止、トイレを理由に授業を抜け出す生徒が多いので、必ず保健室経由でトイレに行かせ、「保健室で渡す紙を教室で提出させる方法をとった。同時に教師が2人1組で校内巡回し、対策を始めてから1カ月で、授業の中抜けをなくした。

ユウは「教員共通の方針を作り、例外を作らないこと」(星野校長)。甘い教師がいると、そこから規則が破られるからだ。

＊

生徒たちの体から、彼らの複雑な家庭環境や歩んできた道を見通すのは、養護・51)。2人体制で、生徒たちに「元気」「学校しいよ」と次々に声をかける。生徒からも負けじと元気な返事が返ってくる。課題はあるが、その屈託のない笑顔に、星野校長は確かな手応えを感じている。(長谷部新一)

エンカレッジスクール エンカレッジは英語で、「励ます」という意味。基礎学力が身についていないために起きる高校中退を防ぐため、都教委が03年に普通科の足立東高と秋留台高の都立校2校を、今年春には都立練馬工業高を指定した。都教委は中退させずに進学・就職させることが生徒本人にも、社会にとっても利益になり、需要もあるとして、指定校をさらに増やすことを検討している。

(49)。2年前の歯科検診では、虫歯の治療をしていない1年生が81・5%で、都の前年平均32・7%を大きく上回った。

「朝ご飯を食べてない」から、常に口の中にお菓子を入れている。歯を磨きんとう磨く習慣もないので、歯肉炎も多い」。このため、歯ブラシを生徒に配布、正しい歯の磨き方も指導した。

こうした地道な細かい指導もあって、昨年度の退学者は全校生徒510人中38人まで減った。進学や就職など進路が決まった生徒も、03年度の約3%から昨年度は約75%に。志願者も増え、今年2月の前期入試倍率は男子で2・23倍、女子で2

2006年5月17日付　読売新聞

責任はいったいどうなっているのでしょうか？上記のような高校をいくら作っても問題の本質の解決にはなりません。敢えて厳しく言えば、「甘やかしの教育」と同根です。小学校中程度レベルの知識で「高校卒業証書」を渡すのですから。子供達は、学校というところはチョロイ所だとしか思わないのではないでしょうか？そして、社会に出てから突然、荒波に揉まれるのです。そうするとまた、「優しさの仮面」を付けた大人達が「社会が悪い」といちゃもんつけて甘やかし続けるのが今の日本の現状かも知れません。それでは何時まで経っても、その子（青年）達は大人になれないでしょう。だから、現在の公立小・中学校は「卒業程度学力到達診断テスト」ですら、「学校の序列化を促進する」

という詭弁を弄して実態を隠し続けるのです。調査テストの結果の公表を拒む学校、つまり、校長や教師は、自分達の「不作為」を隠すのが目的だと捉えられても仕方が無いのではないでしょうか。親達は学校選択の権利も奪われてしまうのです。

ケーススタディ２

次は、関東の某底辺校の学校改革の軌跡です。それこそ、かけ算すら危ういような生徒が集まる地域の教育困難校でした。徹底した生徒指導と、小中学校レベルの「学校設定科目」の取り組みで、見違えるような変化を実現した学校です。生徒達は高校生になっても、小学校レベルの算数でも、「分る！」という実感、達成感は素直に嬉しいのです。今までそんな感覚を得たことがないのですから。実はこの学校、生徒指導についてベンチマークに私の前任校を訪問した学校だったのです。お互いにノウハウを共有して、両校とも一定の成果を挙げることができたことが分って非常に嬉しかったことを思い出します。さて、次の問題は、今、小学校が荒れているということです。昔は、学校が荒れると言えば、高校というのが相場でした。少し前まで中学校、でも今は小学校が暴力沙汰の現場になっているのです。２００５年度の表面化した実態、教師暴力が３８％も増えて約５００件近く、公立小学校の校内暴力は２０００件を突破したという記事が新聞紙上を賑わしました。腕を掴んだだけで“暴力教師だ！”と叫ぶ男子児童、肩に手をかけると“セクハラだ！”と脅す女子児童…、いったい何を考えているんだと怒鳴りたくもなるのではないでしょうか？でも、そんな子供に誰がした？といえば、私達大人の「甘やかし」であることは間違いありません。世の中に叢生している「優しさの隠れ蓑」や「優しさの仮面」をつけて得々としている教師や現場を知らない大学教授や教育学者が、学校世界をどんどん崩壊の淵に追いやっているのです。さらには、「公立学校の私学化」も顕著です。県（都）立高校の学区の撤廃は既に２０都県に広がり、今や県立の“中等教育学校”つまり中高一貫教育学校へどんどんシフトしています。それも、進学率トップ

の県立高校内に附属中学校を“新設”しているのです。これは他の既存公立中学校に対する「序列化」なのではないでしょうか？それとも、他の市町村立中学校に対し、「県立中学校」とでもいう新たな“校種”をいつの間にか作ったのでしょうか？そして、私学にとってそれは「黒船」、と言うより「Ｂ２９」（…による無差別爆撃）とも感じるのは私だけではないと思います。こうして、日本の学校制度も「羅生門化」して行くのでしょうか。

社会の風潮と教育の責任

ところで、「甘やかしの教育」から「あ」を取れば、「まやかしの教育」となります。私は、ゆとり教育は当初の甘やかしの教育から、最早、“まやかしの教育”になっていると思えるのです。子供は放っておけば、だんだん野生化していきます。「大人の怠慢」が「子供の傲慢」を生むのです。挨拶ができない、敬語が使えない、そして、自分勝手な生き物になっていきます。それは当たり前のことです。子供を支配しているのは本能なのですから…。本能を適切に抑制し、管理するのが教育です。何度も言いますが、それを「子供中心主義」という“美名の隠れ蓑”を着て、放任し、我欲（わがまま）を「多様なニーズ」という詭弁を弄して眼をつぶる怠慢な大人（親や教師）が傲慢無礼な子供を作るのです。水は低きに流れ、悪貨は良貨を駆逐する喩え通りです。それを正すのが教育であり、優しいだけでは本物の教師にはなれません。さらに、最近流行ったのが「生徒は顧客」、あるいは、「教育はサービス」というまやかし…。グローバル化の流れの中で「サービスは無料ではない」のですから、親はサービス（教育）を買わなければならないのです。何故、小学校の教科書を国費で提供するのでしょう？教育費を何故に国庫負担するのでしょう？そして、生徒は顧客と言うのなら「顧客は神様」です。生徒が言う「無理」も通さなければならないのです。これで果たして、まともな「教育」ができると思う方がいるのでしょうか？「学校（教育）にも民間企業の活力を！」と

言うのであれば、「競争原理」を否定してはならないのです。何でも平等という悪平等が蔓延（はびこ）れば、学校（教育）は崩壊します。「偏差値は悪」というまやかしは、今も大手を振って公立学校世界を闊歩しています。しかし、裏に回れば、大手予備校の「偏差値」結果を信奉しているではありませんか。そして、戦後最大級のまやかしの一つが「ジェンダーフリー」。これは“女性尊重”の思想でも何でもありません。「過激な性教育」は、今や小学校も「汚染」しています。性の自由化を叫び、愛を無視したセックスも「女性解放」と奨励し、「家族よりも個人」と家族の絆も軽視するような思想です。それから今、最も危ういのが日本のマスコミだと思うのです。チベット騒乱やオリンピック聖火騒動関係で、国内（長野）で中国人集団に日本人が暴行されても新聞やＴＶでは一切報道しませんでした。また、韓国の政府やマスコミは、竹島はもとより、対馬さえも韓国領土だという風潮が支配しているということも知っていながら、日本の報道機関はそのことを黙過しています。これはいったいどこの国の報道機関なのかとすら思います。また、「毒ギョーザ事件」については中国国内では未だに“日本で毒混入”という偽情報のままという状況について、政府は抗議もせず、我々国民にも知らされません。これでは政府すら信用できなくなります。今の日本は、あらゆることで「平等と公平」の差が分らなくなっており、子供達を甘やかすだけでなく、自分自身にも甘い日本人像が浮かび上がってきます。今私が思うことは、教育現場で『稽古照今』、日本人の智恵に学び、日本人らしい日本人を育成することに心血を注ぎたいということです。その為に、「ならぬことはならぬものです」という会津の「什の掟[2]」の精神や、日本を教育立国にしたいという明治天皇の御心が溢れる「教育勅語」を大切にして、子供達の教育に携わり続けたいと願っています。

2：会津藩では10歳になると全ての藩士の子弟を白虎隊で知られる藩校「日新館」で学ばせた。それ以前の6歳から９歳までは居住地域別に細分化した「什」と呼ばれるグループに分け、子弟同士の自主教育活動を奨励した。その「什」で実践した「七ヶ条の掟」を指す。